ふじのくにグローバル人材育成事業　報告書

参加したコース	ふじのくに地域探究コース （ものづくり地域産業コース）			訪問国	ドイツ	
学校名	静岡城北高校	氏名	松永 珠実		学年	2

トビタテ留学ジャパンは私にとって、自分の夢を叶えるとともに自分のことを知るきっかけになりました。この制度に応募した理由は、自分の語学力はどれくらいなのか、自分には何ができるのか、など自分を見つめ直したいと考えていたからです。

この事業への応募にあたり、探究活動はもちろん、自分自身と向き合う時間を作りました。1年次から続けてきた探究テーマを「衣服のリサイクル活動」にしたきっかけは母にあります。母の職業は縫製工場でミシンを扱う技術職です。私は小学校のときから、夏休みや、冬休みなど、一日母の仕事が終わるまでその仕事場で勉強していました。そのため、母の仕事や同じ工場で働く大人の話を聞く機会があり、ファストファッションに興味を持つようになりました。

留学前は、自分の存在にも自信がないまま学校生活を送っていました。静岡城北高校のグローバル科には、スピーチコンテストで活躍したり、英語のプレゼンテーションが得意だったりと、とても魅力的な友達がいます。せっかくグローバル科にいるのに何もしないのは嫌だ。でも、私には何ができるのだろうかと悩むこともありました。そんなとき母は、「学力を問わない、探究をテーマにする留学制度もあるんだって」とトビタテ留学ジャパンの説明会に誘ってくれました。しかし、その時はまだ私自身が留学している姿を全く想像できませんでした。悩んでいる私を親は励ましてくれました。また、担任の先生や成島先生など、グローバル科を応援してくださってる方々の後押しがあったお陰で、自分の目標や探究活動の目標などを明確にすることができ、留学する夢を叶えることができたと思います。

一言では言い切れませんが、留学は思いも寄らないハプニングの連続でした。トビタテ留学ジャパンの合格通知から私の留学まで準備期間が短かったため、自分に余裕はありませんでした。自分の心の準備もままならず、学校の勉強と、部活、探究活動の計画などと、とにかく私が経験したことがないくらい忙しかったと思います。そのため、十分と言えるほどの準備ができず、時間の流れとともに留学が始まったと感じました。

ドイツでの生活は、平日は午前に語学学校、午後は街の探索と探究活動をしていました。ホストファミリーの家から語学学校までバスとトラムで通いました。トラムとはドイツの街で走る、日本で言う路面電車のようなものです。乗り心地はバスのように快適でしたが、エアコンはなく、朝は冷え込み、日中は暑く汗をかいてしまいました。語学学校の初日は学校で言われたとおりにキヨスクに行き、1month 切符を買いに行きました。しかし、言語が通じず、間違った切符を買ってしまいました。ドイツでは、私と同じ世代の人たちは英語を学校で習っているため話せるのですが、親の世代では英語がほとんど通じず、ドイツ語で話します。私もドイツ語は少ししか触れていなかったため、うまく交渉ができませんでした。せっかくドイツ留学に来ているのに喋ることができない、とても悔しいと感じ、ホストファミリーにドイツ語の発音を教えてもらいながら、料理の手伝いや庭の手入れを一緒にさせてもらうなどして、話す機会を増やしました。とても貴重な機会でした。探究活動では当初計画していた企業訪問は断られ、思うように調べられませんでした。そういった焦りがあったからか 5 日間熱を出してしまいました。冷静に考えるうちに二度と体験することができないチャンスを逃したくない、意地でも何かしなければと思い、企業訪問の代わりに語学学校周辺の店などを周り、環境に配慮した活動などをしている店を突撃インタビューしました。

貴重な話を聞くことができたことが嬉しかったですし、何よりも自分でチャンスを掴みに行けたと実感したことがとても嬉しかったです。様々な人と交流する中で感じたのは、語学習得は未熟で相手にうまく伝わらなくても、自分の気持ちを行動で示し続けることが大切だということです。

今まで勉強や部活動に対して、私にはできないという理由で頑張ることを諦めていました。今でも相変わらず勉強や運動は苦手ですし、学校に行きたくないと思ってしまうことがあります。しかしこの留学を通し、人生の目標、夢というのは言葉で示すことも大事ですが、それらを叶えるために今の自分には何ができるのかを考えて、行動することが最も大事だということを学びました。私はもう、思うようにできない自分が嫌いだと、自分を否定したりはしません。(ここに宣言します！)目標に向かって行動し続けます。

結びに、学校の友達、先生の支えもあったからこそ自分の力を引き出すことができたと思います。また、留学をする機会をくださりありがとうございました。重ねて、お母さん、お父さん、いつも応援してくれてありがとう。